

上演8 岩手県代表
岩手県立黒沢尻北高等学校
作 森陽平
「空想少女」

講評文
仙台市立仙台青陵中等教育学校 斎藤琴音

アンネの日記がなければ私たちは彼女のことを知り得ず、どこにもいないことにされた女の子のままだった。しかし読み継がれ、また本劇のように伝えられ続ける限り、アンネ・フランクの存在は決してなかったことにならない。人の死は二度あり、本当の死は誰からも忘れられることだというが、その意味でアンネはずっと生き続けているし、これからもそうであって欲しいと強く思われた。

作中、時間警察は自分たちの空想を正しいと信じ、自分達と違う人々を排除している、と語られる。自分達の考えが正しいと疑わず、他者を弾圧することで現実を都合の良いように作り替える。歴史上確かにあったことだし、今もどこかできっと起こっている。どこにもいないことにされた人々にも1人づつ人生があったこと、彼らの苦しみをなかったことにしてはならない。過ちを繰り返してはならない。観た人がこのようなことを考えている時点で、この劇はアンネの「忘れないで」という願いに対するアンサーとして成功している。また『アンネの日記』は、弾圧された側から見た戦時下を知ることができる点で戦争ジャーナリズムとして重要な本だ。アンネのジャーナリストになりたいという夢は、私たちが読み、知ることで叶っているのだ。

劇中劇で恵が大志に伝える「あなたの存在は私が確かに認識しているから幽霊みたいだなんて言わないでくれ」という思いは、アンネが言われたかったことではないかと思う。アンネに直接伝えることは叶わないが、私達観客はその願いに「語り継ぎ、なかったことにしない」ことで応えることができる。是非そうしたい、と思われる劇だった。